

大阪市大地理学教室開設50周年に寄せて

伊藤 和

私たちが大阪市大に入学したのは、1957年と58年。戦後が各地にいろんな形で残っていた時代だった。杉本学舎も進駐軍に接収されて10余年、返還されて間もないと聞いた。本館、図書館、教養部学舎など、わずかな鉄筋学舎を除けば、雑草に覆われた広大な敷地にベンキのはがれたカマボコ兵舎と、どこまでも続く金網のフェンスの景観あるのみ。地理実習室も教養部裏手のはずれにあった。白と緑のベンキがはがれ落ちたトタン屋根の兵舎跡。本館南裏手のクラブ部室に当てられたバラックなどは、守衛さん達がパンパン部屋と呼んでいた。それらは、学問の場・大学に胸弾ませて入学した新入生達を、複雑な気持ちにさせるに十分だった。

そんな殺伐としたキャンパスだったが、間もなく、私たちが勉学に、クラブに、遊びに打ち込ませたのは、市大の伝統あるアカデミズムと恒藤恭学長をはじめとする人材があったからだろう。そして、それぞれが別々に無意識にそれらに染まっていったからなのだろう。粗末な学舎に比べて、地理教室のスタッフは、なんと豪華で贅沢な先生方だったことか。今にして思えばである。

「然り而して、そもそも我が国における散村地域は…」と。合間に“あいや節”の一節が加わる名調子で地理学特殊講義Ⅰ(集落地理学)を講じられた村松繁樹教授。背丈よりも高い箱尺を引っ提げて、条里遺構鮮やかな畦道をカモシカのように駆け回られた地理学実習Ⅲ(野外調査実習)の波辺久雄教授。「『おっちゃん。今年は豊作でたのしみやろなあ…』こんなところから地理学ははじまるんや」と、ともすれば既成公式理論に現実を当てはめてよしとする方法論に警鐘を打ち鳴らされた地誌学の藪内芳彦教授。川口慧海の跡をたどるネパールの旅レポートを中心とした川喜田二郎助教授の教養部・人文地理。58年度入学生はすでに受講の機会がなかったが、ヨーロッパの牧畜と農耕を講じられた地理学特殊講義Ⅳの水津一朗助教授。マラリア罹病から未だ癒えぬ体で、ラオスの稲作民族調査を語られた地理学特殊講義Ⅱ(民族学)の岩田慶治助教授。夏は完全暖房、冬は完全冷房完備の地理実習室で地理学実習Ⅰ(室内機械器具実習)を担当された木村宏助手。こんな先生方に極少数の学



杉本町本館前庭にて 1962年卒の5名

生が囲まれていたのである。ただ一点、教室開設以来のお家芸・共同地域調査研究が、この頃下火になってしまっていた。いろいろいわれたが、ただ一つ今も残念な思いが鮮明である。

神大・山崎貞教授（工業地理学）の回転椅子を最高位にあげておいた。小柄な先生がこの椅子ににじりあがるように腰掛けられるのを見て楽しんだり、村松教授が本館前庭を急ぎ横切って教室にこられるのを確認した上で、5人全員が教室から消えてしまったこともあった。たあいのないいたずらを楽しんだつもりだったが、後日村松先生の憤慨を先輩から聞かされる羽目になった。

京都教育大・水山高幸助教授の自然地理の講義があった。人文系の講義ばかりのところ先生は自然地理は新鮮だった。デービスの侵食輪廻説を辻村太郎の訳書で講じられた。これを契機に自然地理書の古典を求めて、京都百万編・寺町の古書街をあさり廻った時代もあった。

村松教授が担当された阪神大都市圏連調査「一体性の研究」では、教授の矢田のご自宅でアンケート集計に鈴木と伊藤がアルバイトで従事した。同「土地利用調査」ではそれぞれが地域を分担した。伊藤は京都と滋賀を担当し、立命の地理学生にアルバイトで手伝ってもらった。それらのまとめは、新館成った共同研究室で5人全員が従事した。この仕事で、先輩方にいつも誉めてもらえたのは、唯一図表作成での中野のレタリング術だけだった。

関地研（関西学生地理学研究会）の会長校が廻ってきたことがあった。これで他大学の地理学生との交流がずいぶん深まった。集まったのは、三重大、滋賀大、京大、京都教育大、奈良女子大、大阪教育大だったろうか。奈良女の某女と中野のかなわぬロマンスもあった。日本地理学会岡山大会を契機に、全国地理学生研究会を旗揚げしようと、東地懇（東京地理学生懇談会）の細野君、岡大学生とも連絡を取り、5人？で岡大大会に臨んだ。帰路はなぜか四国経由で徳島から帰阪している。先輩の井上さん・白石さんも一緒だったと記憶する。このとき中野は密かにかなわぬ恋の某女の郷里・普通寺を訪れていた。後日談として本人が明かしたことである。

先刻まですっかり忘れてしまったと思っていたこれらの記憶と光景が、書き始めてみるとまるで昨日のここのように蘇ってくる。青春の日々こうして学んだことどもが、それぞれに違った人生を歩む私たちの大きな糧となっていることを誰しも疑わない。

<6人の近況など>

◎阪上嘉之：教師という職業にあこがれ、そして最終的に自ら夢やぶった私は、工作機械メーカーで34年フルに働き、全力投球した。今や、日本の工作機械は完全に世界を制覇した。生涯教育が語られるようになって、最近私も、昔の夢に少しでも挑戦しようとかんがっている。地理歴史の本も読み、博物館巡りも欠かさない。平成5年学芸員資格認定試験に合格し、地域の役に立ちながら第2の人生を楽しみたいと考えている。

◎鈴木治夫：（62年卒同期生で、ひとり教職以外の職に就いた同君。彼のJICAにおける世界的な活動経歴を、特別寄稿扱いで掲載していただきます。…編者注）

3回生になったら何を専門科目に選ぶべきかを考えつつあった1958年の暮れに「探検部」が誕生した。当時の学内にあっては岩田慶治先生が東南アジア稲作民族総合調査を終えられ、梅棹忠夫助教授

を野戦の司令官、吉良竜夫教授を作戰参謀とする東南アジア学術調査隊が帰国報告会を開いており、川喜田二郎先生も西北ネパールから戻られたばかり、と、回りを見れば探検家の先生方が大車輪であった。初代の探検部・部長を引受けられた村松繁樹先生は軍資金が要るだろうと、59年の春には受託調査の仕事をまわして下さり、新入部員の須江国郎さん、伊藤和君と私が下請けをした。地理学科に入ったのは翌60年であった。

本格的海外遠征の第一弾、カンボディア王国（京都大学の探検部と合同）にようやく発つことになった1962年秋、私は理学部・梅棹研究室の研究員になっていた。7人の調査隊のフランス語通訳という仕事をもらったが、王宮にシハヌーク殿下を訪ねたときは京大の浪員隊員がやってくれた。4ヵ月後に帰国、綾部市の農場でお百姓を体験したあと、できたばかりの海外技術協力事業団にカンボディア人研修員の臨時通訳として雇ってもらえることになり上京。翌年正職員となり、東京オリンピックの聖火を見ながら通勤した。

最初の海外勤務はラオス王国であった。800haのかんがい農業開発プロジェクトを支える日本人専門家チームの調整員。庶務と渉外が仕事であった。上空を北爆に向かうアメリカの戦闘機が飛んでいた。

帰国した翌年、1974年に300人ほどの海外技術協力事業団は他の特殊法人と合併し、1000人規模の国際協力事業団、JICAになった。1979年、戦後賠償が終り、「無償資金協力」に看板が掛け替わり、外務省はその業務の一部をJICAに移管することを決めた。

その無償業務に馴染むまもなく、2回目の海外赴任はモロッコ王国ということになった。スキーのできるアトラス山脈がそびえ、数個の発電ダムをもつ長大河川が流れ、恐竜化石の出る丘陵があり、四季折々の花と果実と新鮮な魚介に恵まれたモロッコは青年海外協力隊の駐在員にとってコトバの壁もあったけれど住み易い勤務地であった。宣伝が行き届いて、1982年の夏休みには同期の4人全員がロンドン・マドリッド経由で訪ねて来てくれた。私のブジョーと事務所の運転手のルノーに分乗して、古都フェズ、泉の町ベニメルル、サハラへの入口エルフード、古都マラケシュ経由で最後はカサブランカに1泊という、ほぼ1週間連続の移動同窓会を楽しんだ。ラオスで幼稚園児であった長男・長女はこの地ではアメリカン・スクールで学び、バイリンガルになった。

再び10年ばかり経った。1990年に、新幹線や東名高速道路の建設等のために借りていた世銀借款を完済、日本はこの年からアメリカを抜いて世界21カ国、1機関の「援助する側」のトップに立っている。こんどはフランス事務所長の辞令をもらい、1992年秋から2年8ヵ月をパリで暮らすことになった。私を含めて2人の職員と2人の秘書の小さな事務所で、アフリカの仏語圏での協力を後方支援すること、援助する側のフォーラム「開発援助委員会(OECD・DAC)」をフォローすること、アフリカ援助における日仏協調を図ることが主務であった。仏語圏に派遣される前にフランス語の補完研修を受ける青年海外協力隊員、行き帰りの専門家や調査団員、ときにNGOの人たち、アフリカ各国で援助の実務に携わる大使館・JICA事務所向けのセミナー参加者、DACの諸会合に出席する幾ヶ関の公務員たち、パリに本拠地や支部を置くユネスコ、国連環境計画、世銀などの国際公務員（には日本人も多い）、連携を模索するフランスの企業・大学人、などなど年間ほぼ800人が事務所を訪れた。ルワンダ、ブルンディやスーダンからも緊急避難の隊員たちが逃げて来たり、イエメン内戦でジブティ（旧フランス領アフアル・イッサ）に避難した30余人の救出はパリのわれわれの仕事

になった。この街では残念ながら移動同窓会は開けず、長男も就職して合流しなかったが長女は頑張ってトリリンガルになった。

30年ほどの時間の経過で、日本は援助実施機関を立上げ、世界一のドナーになり、なおアジア中心とはいえ百数十の途上国に専門家、協力隊員、調査団を送り込むようになった。私は地理学を学び、フィールド・ワークを知り、王国や仏語圏のみならず、数十ヶ国で現地調査に携わって報告書を書いてきた。つねに援助の最先端で働き続けることができたのは運がよかった、とも思っている。

1995年初夏に大阪に戻り、茨木市にある国際センター所長になった。歩いて20分くらいで行ける民族学博物館の梅棹先生には「故郷に錦、ゆうわけやな」と言われた。1年8ヵ月勤めて早期退職し、現在は熊谷組の海外本部で顧問をしている。

◎川上憲一：5年前、たまたま訪れたミクロネシアのパラオ共和国。もう6回訪問している。ある時アンガウル島の海岸で初老の婦人に会った。樹木医でもある彼女の経営する“自然農園”に立つとき、来春に迫った教職生活38年の定年後の生き方がふっとひらめいた。この渡辺君江さんの「自然農法」を支えとして、私自身も、自分のささやかな土地を相手にささやかな実践を試みようと思っている。

◎大空紀之：5人はいつも一緒だった。村松先生の調査の仕事も、先生の講義を逃げたのも、山崎先生の椅子を高くしたのも5人だった。夏休み、研究室で御大がステシャツ姿に団扇片手で、アツツ・アツツを連発しておられたのも5人が知っている。いろんな山にも5人で登った。JICAの鈴木招きによりモロッコで5人の同窓会もした。アトラスを越えサハラの日を出を拝んだのも、気温50℃を体験したのも5人一緒だった。

◎中野祐二：市大でてかーら30年、ヨイショ！ この間ずーつと北野高、ヨイショ！それから7年6ヶ月、ヨイショ！ いーまーじゃ大正の大親分？ ヨイショ。「北野に30年もいたもんが大正でつとまるか？」といわれた。来年3月定年やちゅうのに、まだそんなこと考える余裕もあらへん。北野と違くて、大正の生徒は人なつっこい。かわゆーうてたまらん。進路指導にはまってしもとる。そやはけ、この近況報告も、編者に代筆依頼した始末。

◎伊藤和：村松先生のご紹介で今の職場にちょっと腰掛けで就職した。爾来37年。学究を目指して2ヶ月の国際地理学会ニューデリー大会に参加した頃もあった。村松先生が外遊の残りだとおっしゃってドルの餞別を自宅に持参して下さい。しかし、結局職場にはまって教師生活31年、その後は経営責任を一身に負う身になった。遠回りして最終フィールド朝鮮半島にたどり着き、韓国地理文献の翻訳を進めている。しかし、これも自分が育てた手強い労組との対決の明け暮れで身が入らない。地理学との唯一の接点が風前の灯火である。その分3年後の定年の楽しみが増すということか。

※この文は、鈴木治夫の「特別寄稿」を除いて、それぞれがしたための短文を伊藤が要約・編集し一文にまとめました。ために、個性あふれる各人の折角の表現やリズムがすべて消失しました。その責は編者が負うものです。

(昭和37年卒業・昭和42年修了)

影藝主青



モロッコでの同窓会 ラバト王宮にて
中野・(衛兵)・伊藤・大空・鈴木・川上(前)



香港にて (版上：1998年正月)